

## 教員おすすめ図書コーナー推薦書

教 員 氏 名	
佐藤 和宏 先生	おすすめメッセージ
<p>① 図書名：「叱る依存」がとまらない</p> <p>著 者：村中直人</p> <p>出版社：紀伊國屋書店 ISBN：4314011882</p>	<p>ここ 1 年くらいだろうか、ハラスメントという言葉に胸がザワザワしている。「した」と過去形にして忘れないように、去年は雑誌『世界』の森喜朗（元）首相に関するコラムを薦め、今年は、たまたま知ったこの本を読むことにした。叱るという行為は、一見して「叱られる人のため」「いま叱っておかないと後で困るから」と叱られる側の視点に立っているようでいて、その実、叱る側の依存である、ということを主張した本。授業期間、（もとより私の授業はおもしろくも上手くもないのだが）自信を失っていた時期に読んだこともあり、たいへん身になった。依存症とは、①コントロールできないから「病気」なのであり、②言い換えると人格と症状は別であり、③「病気」だから治せることを強調した、『世界一やさしい依存症入門』（2022 年推薦）も参照のこと。</p>
<p>② 図書名：自分ひとりの部屋</p> <p>著 者：ヴァージニア・ウルフ著・片山亜紀訳</p> <p>出版社：平凡社 ISBN：4582768318</p>	<p>授業をして一番学びになっているのは、誰だろう、教員だと思う。カードリーダー恐怖症（古き良きと言えるか分からないが、「昔、高経にはピ逃げという言葉があっじゃな…」）である私は、平常点として、コメントペーパーを毎回出してもらい、できるかぎり読み、それにリプライするようにしている。数年前だったか、住宅政策論の授業でハウジングファーストのことを扱った際（稲葉ほか編『ハウジングファースト』は良い本）、「授業を聞いていて、ヴァージニア・ウルフを思い出した」というコメント。いつか読もうと。約 100 年前、第一波フェミニズムは女性参政権を獲得した。100 年経ち #MeToo が新しい潮流に。「女性が小説を書こうと思うなら、お金と自分ひとりの部屋を持たねばならない」、この言葉の実現のため、私は懸命に生きる。</p>
<p>③ 図書名：世界の片隅で日本国憲法をたぐりよせる</p> <p>著 者：大門正克</p> <p>出版社：岩波書店 ISBN：4002710769</p>	<p>ゼミの研究室訪問で嬉しい出会いがあった——私の言葉は届いていたのだ！ 昨年、障害を持つ人について書くことになり、戦後憲法・教育基本法がありながら、障害児への義務教育は遅れをとったと知る。映画『まなぶ』をぜひ見て欲しいが（涙がずっと止まらなかった）、貧しさゆえに学ぶことが叶わなかった人もいた。学ぶことのできる私たちは、懸命に学ばなければならない。</p> <p>1 章を読み、『在日朝鮮人女性による「下位の対抗的な公共圏」の形成』、映画『スープとイデオロギー』を想起した。憲法を知らない人間が憲法を変えようとする中（境家史郎「“非”立憲的な日本人」『中央公論』）、本書は、生活と歴史に立脚しつつ、私たちの憲法観——憲法を守らせ、憲法観を更新すること——こそ、生きていく指針であり理想であることを示している。</p>